

中世の同範軒瓦の調査

1995年から1997年にかけて中世瓦の調査を集中的におこなった。本稿では現在までに判明した同範軒瓦についての概要を記す。なお、中世瓦の年代の細分については、I期(1180~1210)、II期(1210~1260)、III期(1260~1300)、IV期(1300~1333)、V期(1333~1380)、VI期(1380~1430)、VII期(1430~1500)、VIII期(1500~1575)とする。

①東大寺再建瓦(岡山県出土瓦と東大寺瓦の比較) I期

中央の梵字を囲んで「東大寺大仏殿」と記し、その外に8弁の蓮華文を配する軒丸瓦はA~Iの9種を確認した。岡山県と奈良県で出土したのはA・B・E~Iで、東大寺南大門のCや東大寺蔵のDの2種は岡山県では現在まで未発見である。しかし、胎土や技法及びこれらと組み軒平瓦の技法からみて、この9種がすべて岡山県万富窯産(広義の意味では吉井川添い)であることは、まず間違いない。1997年調査。

②鎌倉極楽寺と京都壬生寺 II期

鎌倉極楽寺の瓦を実見した際に、原廣志・小林康幸の両氏から側面蓮華文軒丸瓦が京都壬生寺出土例と同範の可能性が高いとの教示を受けた。その後、元興寺文化財研究所で壬生寺出土例を実見する機会を得た。両者とも同一箇所に範傷があり、同範は間違いない。胎土も酷似する。この文様の軒丸瓦は京都石清水八幡宮から出土していること等を考えると、京都産の瓦が鎌倉へ運ばれたものと理解してよいだろう。1997年調査。

③姫路円教寺・大和薬師寺・唐招提寺・法隆寺と

河内竜泉寺 III期

姫路円教寺の蓮華唐草文軒平瓦については、1992年に薬師寺・法隆寺例と現物照合し、その成果を「三村山極楽寺跡遺跡群」(1993)で報告したが、今回は河内竜泉寺と薬師寺・法隆寺例との現物照合をおこなった。同範であり、製作技法も同一であるが、胎土は明らかに異なる。大和の瓦工の河内での出張製作を示す。竜泉寺例については「南都・在地瓦工が共同で焼造」「額貼付(包み込み?)」(桃崎祐輔「鎌倉時代蓮華唐草文軒平瓦の系譜と年代」『考古学雑誌 一西野元先生退官記念論文集一』1996年)という見解があるが、現物もみないで報告書の図版だけをもとに過度の論を立てることがいかに恐いも

のであるかを如実に示す。1997年調査。

④河内須弥寺・獅子窟寺と大和薬師寺 III期

交野市教育委員会の真鍋成史氏の協力によって、1997年発掘の須弥寺の巴文軒丸瓦・蓮華文軒平瓦と薬師寺の軒丸・軒平瓦を現物照合する機会を得た。両者は軒丸・軒平セットで同範になることが判明した。製作技法は同じだが、胎土は異なる。薬師寺の巴文軒丸瓦は玉縁部まで残っており、丸瓦の吊り紐から判断して、この一組がIII期まで遡る有力な根拠を得た。

⑤尾道浄土寺と大和大安寺(2種) IV期

尾道浄土寺と大和大安寺で同範の軒平瓦は花菱唐草文軒平瓦と菱形唐草文軒平瓦の2種がある。花菱唐草文軒平瓦は、浄土寺段階では外区が二重圏線となっていた范型が、大安寺段階では外周を切り縮め一重圏線となっている。両者は技法では差がないが、胎土では、浄土寺例が白色粒を多量に含み明らかに異なる。この瓦は、嘉暦2年(1327)の浄土寺本堂再建当初の瓦に間違いない。この時、大和の瓦工が尾道に出張製作に来たことは間違いない。次に菱形唐草文軒平瓦も、浄土寺と大安寺で同範関係にある。範の切り縮めなどの前後関係を明確に示す資料はないが、浄土寺例の方が文様がシャープであるから、これもやはり浄土寺用として使用され、後に大安寺用として使用されたものであろう。この瓦も、文様構成・製作技法の点からみて、IV期の瓦とみてよい。1995年に浄土寺にて現物照合。

⑥河内宮町遺跡と大和大安寺・西大寺 V期

八尾市宮町遺跡出土の2種の軒平瓦は大和大安寺・西大寺出土例と同範である。1種は花菱唐草文軒平瓦で、大安寺・宮町遺跡例は同一場所で照合。両者は同範で、胎土も同じ。西大寺の瓦(西大寺所蔵)とも同範である。他の1種は中心無飾均整唐草文軒平瓦で、大安寺で使用された後、宮町遺跡・西大寺段階で範の両端を切り縮め使用されている。宮町遺跡と西大寺の出土例は、胎土も同一である。1996年調査。

⑦河内竜泉寺と大和唐招提寺・喜光寺 VI期

河内竜泉寺出土の菊水唐草文軒平瓦は、大和唐招提寺出土例と同範であり、この範は後に、両端を切り縮めて喜光寺で使用されている。今回現物照合したのは竜泉寺と喜光寺例で、技法は同じだが、胎土は異なっている。1997年大谷女子大学資料館にて調査。

⑧紀伊根来寺と大和薬師寺 VII期

紀伊根来寺出土の蓮華唐草文軒平瓦は大和薬師寺出土のものと同范である。技法は同一だが、胎土は微妙に異なっている。根来寺出土の瓦は、大和の瓦と同范とみて間違いないと思われるものが他にもあるが、今回、この瓦は実見できなかった。蓮華唐草文軒平瓦は、1996年、和歌山県立埋蔵文化財センター管理棟にて現物照合。

⑨河内竜泉寺と大和薬師寺 VII期

宝珠水波唐草文軒平瓦は河内竜泉寺と薬師寺とで同范。技法は同一だが、胎土は異なる。1997年現物照合。

⑩摂津久安寺と大和薬師寺 VII期末・VIII期初頭

池田市久安寺楼門と大和薬師寺出土の宝珠唐草文軒平瓦は同范である。范傷があるが、傷からは両者の前後関係は決め難い。両者の胎土は異なる。薬師寺例では顎はりつけが明瞭であり、VIII期初頭と考えてよいが、久安寺例は瓦当はりつけ（久安寺は完形品であり、ごく一部の割れの観察から）の可能性があり、VII期末に遡るものであろうか。1997年、久安寺にて現物照合。

⑪河内大谷廃寺と大和薬師寺 VIII期

交野市大谷廃寺出土の宝珠唐草文軒平瓦は、薬師寺出土例と同范である。技法は同一だが、胎土は異なる。こ

の瓦は薬師寺西塔で多く出土しており、薬師寺西塔が兵火によって焼失する享禄元年（1528）以前であることは確実である。1997年、交野市文化財事業団にて現物照合。

⑫山城栢杜遺跡・醍醐寺五重塔と大和諸寺 各期

山城栢杜遺跡方形堂出土の3型式の軒平瓦は、いずれも大和と同范である。軒平Aは東大寺等と同范（II期初頭）。軒平Bは元興寺極楽坊等と同范（II期）。軒平Cは法隆寺等と同范（V期）。このうち同一場所で見物照合できたのは軒平Bだけであるが、胎土は両者酷似する。一方、醍醐寺五重塔の屋根にのっていた軒平瓦のうち、大和と同范関係にあるのは6型式あり、そのうち現在醍醐寺に所蔵されている5型式と大和の諸例とを現物照合した。第1は興福寺と同范のもの（平安末）、第2は法華寺・西大寺等と同范のもの（III期）、第3は法隆寺と同范のもの（IV期）、第4は法隆寺と同范のもの（VI期）、第5は法隆寺と同范のもの（VI期）であり、いずれも胎土が類似する。山城伏見区醍醐における栢杜方形堂と醍醐寺五重塔の瓦が大和と同范で、かつ胎土が同一であるということは、中世の大和の瓦は、京都へは、瓦自体が運ばれるのが一般的であったことを示すものであろう。1994・1996・1997年調査。（山崎信二／平城宮跡発掘調査部）